巻頭言

Causerie

野町　啓

一体いつ頃、プラトンやアリストテレス、アウグスティヌス、トマスの名前を知ったのか、おぼろげな記憶をたどってみると、ド田舎の新制高校（この呼び方はいまや死語となってしまった）の二年生の「世界史」の授業ではなかったかと思う。さすがに、中世はみるべき思想は皆無の暗黒時代とは教科書には書かれていなかったが、中世はアリストテレス主義を基調とするスコラ哲学の全盛期であり、それがイタリア・ルネサンスの時代になりやっとプラトニズムの復興をみたという記述だけが脳裏に残った。プラトニズム、アリストテレス主義とは何かは教えられた記憶はなく、言葉だけが独り歩きをし、中世ではプラトンは忘却されていたということが、一種のインドクトリネーションの結果として自身の内にドグマ化して残っていった。同じ頃手にした、たしか岩波新書の『ミケランジェロ』であったか、羽仁五郎氏の一文「一夜明ければルネサンスであった」が、なぜかいまだに記憶にとどまっ

ている。

その後、一九五五年、大学三年の時、「哲学概論」の講義の中で、下村寅太郎教授がクリバンスキーの研究にふれられ、中世においてプラトンは決して通説のように忘却されていたわけではなく、修道院において営々と写本が制作され、読み継がれ、影響力を持っていたという話をされた。これを聞いた時、十代の頃植えつけられたドグマが一瞬にして崩壊する愕然とした体験をした。筆者は、かつて小学生の時、戦時中の教科書を墨で塗りつぶす作業をさせられたことがある。その際、ただ筆を動かすという瞬時の動作で、それまでの絶対的な価値観が否定されていき、子供心に既成のドグマのはかなさを痛感したことがある。この時の講義は、それに匹敵する経験であった。よく教科書風にいえばということを耳にするが、特に年少の頃学校で教え込まれた定説なるものは、実は何等検証を経ることのない通説にしかすぎない場合が多い。しかしそれが、思考をなす場合の一種の準拠枠となり、メタナラティブとして牢乎として記憶に残り、独り歩きをし、研究活動の障害となり、さらにあやしげなドグマを作り出す契機となっていることがあるように思われる。

かつて、『ガラテヤ人への手紙註解』の中であったか、ヒエロニュモスが、今日プラトンの名前なり書物を知る者はほとんどいない、と述べているのを目にした記憶がある。中世プラトン忘却説にしても、ある時代のローカルな現象としては妥当性を持つかもしれない。後年、一九八二年であったか、ルーヴァン＝ラ＝ヌーヴで開催された国際中世哲学会に赴く途次、故小山宙丸教授に同行し、ベルン

カステル＝クースの「クザーヌス・ホスピタル」を訪れたことがある。そこでプロクロスの『パルメニデス註解』のラテン語訳写本を手にする機会にめぐまれた。そして同書にクリバンスキーの署名と彼がそれを手にした日が記されているのを発見し、何十年前の講義の内容をなつかしく思い出したことがある。この『パルメニデス註解』のクザーヌスの手択本についても、同書の校訂本を手がけたC・スティールは、その写本自体はローカルな現象にすぎない、とその第一巻（たしか一九八三年に刊行され、その約十年後第二巻が刊行され完成したはずである）の序文の中で述べていた記憶がある。しかし「クザーヌス・ホスピタル」には、かつて『中世思想研究』（第二三号）に掲載した「Philo Christianus」でふれておいたが、筆者が関心を持つアレクサンドリアのフィロンの重要な写本が架蔵されており、こういった写本の蒐集が、フィレンツェにおけるいわゆるルネサンスの展開と無関係ではないことを考えると、単なるローカルな現象としては片付けられないように思われるのである。

以上個人的なとりとめない話をつづけたが、その理由の一端を示すために、さらに私事をつらねることをお許しいただきたい。かつて筆者が勤務していた大学で、図書館建設の構想にかかわったことがある。その際、人文系教官は、ジャーナルや叢書類、それも一九世紀末二〇世紀初頭以来のものを蒐集し、完備する案を強力に出し、それに対し理工系の教官からそのようなものは場所をふさぎ汚いだけだ、そんな文献に執着するから人文科学には進歩も発展もないのだ、という猛烈な反発にあったことがある。進歩なり発展の意味はともかくとして、はたして人文科学は旧態依然のまま止まってい

るといえるであろうか。三〇余年前、W・イェガーの『初期クリスト教とパイデイア』を訳出したことがある。同書の主題は、古代ギリシアのパイディアの理念が、断絶することなく、クリスト教教父へと継承され、「パイデイア・クリスティ」としてカッパドキアの三星、ことにニュッサのグレゴリオスにおいて完成されたとみることにある。訳文を作成していた一九六〇年頃、バシレイオス、ニュッサのグレゴリオス兄弟、ナジアンゾスのグレゴリオスにふれた邦語文献は皆無といってよく、途方に暮れる思いをしたことがある。教父研究会の初期の頃、帰朝早々の宮本教授が、どちらのグレゴリオスであったか、研究発表をされた記憶があるが、その当時でも、まだ三星についての知識は参会者の間にそれほど一般化してはいなかったように思う。しかし、現在はどうであろうか。本研究会のメンバーを中心として、「東方キリスト教学会」が発足し、機関誌が発行され、重要な研究論文や著書が続々と刊行されており、昔日の感がいなめない。やはりそこには、研究上の進展があることを認めないわけにはいかないのである。

現在、中世思想のみならず、ヘレニズム哲学、ネオプラトニズムに関心をいだく研究者の数は、日本においても著しく増大している。これは、筆者の若い頃には考えられなかったことである。かつてわが国では、ヘーゲル主義の悪しき影響、さらには、ヴィラモーヴィッツ＝メーレンドルフ、その後継者W・イェガーを中心とするいわゆるドイツ古典文献学の伝統の曲解が、この方面の研究をはばむ要因としてあったように考えられる。つまりギリシア哲学はアリストテレスにおいて完成の域に達

し、その後の思想の展開は、通俗人生哲学、わけのわからない神秘主義といった哲学のデカダンスの形態にすぎないとみる傾向があった。いわばこうした観点が、ドグマとして、メタナラティブとして勢力をもっていたといえよう。イェガーについても、アリストテレスの研究者・テキスト校訂者としての像のみが支配的であった。筆者自身、翻訳の過程で、なぜ彼がクリスト教教父、しかもほとんど知られてはいないカッパドキア—この地名自体、トルコ旅行熱の盛んな現在とは異なり、当時はどこにあるかもほとんど知る者はなかったのではないか—の三星に関心をいだいたのか、疑問を感じていた。その後イェガーの研究歴を調べるにつれ、彼が、『アリストテレス形而上学成立史』の二年後、一九一四年、『エメサのネメシオス』を公刊し、一時流行をみたネオプラトニズムの起源をポセイドニオスに求める傾向の先鞭をつけており、彼の関心が単にプラトン、アリストテレスに止まるものではないことを知った。彼自身、その本の劈頭で、ネメシオスの名前を知る者はほとんどいないであろう、と述べており、その着目のすごさには驚嘆するほかはない。ネメオシオスは、ポルフュリオスとの関係からも、今後もっと研究されてしかるべき教父なのである。ニュッサのグレゴリオスについても、イェガーがその全集刊行の中心におり、師ヴィラモーヴィッツ自身の希望で、一九〇八年彼の還暦に寄せられた祝い金が全集刊行の基金に充当され、一九二一年第一巻が出版されるはこびとなったのである。ヴィラモーヴィッツがニュッサのグレゴリオスに関心を持つに至った機縁は不明であるが、このエピソードやイェガーの著作が示すように、ドイツ古典文献学の正統な伝統は、アリストテレス

以降の思想展開やキリスト教教父に関心をはらわなかったわけではないのである。

人文科学においては、一方において、時代を経るにつれさまざまなドグマが集積し、それがメタナラティブ化して悪しき影響力をふるう。だが他面、こうしたネガティブな側面が、研究の進展と共に打破され、新しい局面が展開していくのも事実である。ここで筆者に想起されてくるのは、ソールズベリーのヨハンネスが、『メタロギコン』の中で、シャルトルのベルナルドゥスの言葉として紹介している「巨人の肩に乗った矮人」である。この言葉については、さまざまな解釈がなされているようである。あえて筆者流に曲解するならば、われわれ人文科学にたずさわる者は、これまでの重層化した時代の流れという巨人の肩に、いわば逆向きに乗り、逆説的にいえば前方に過去をみながら前進しているようなものだとはいえないであろうか。岡道男氏の遺著『ぶどう酒色の海』に収められた「時制について」によれば、ギリシア人は円環的時間観に立脚しており、過去は「前方に在るもの」と考えていたというが、われわれ人文学研究者は、過去を後にする直線的時間観ではなく、ギリシア的時間観の重要性を認識すべきではないであろうか。